



The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 49 号

(2016 年 7 月 25 日)

発行所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
 名古屋大学教育発達科学研究科 心理社会行動科学講座
 高井次郎研究室
 日本グループ・ダイナミクス学会
 E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp
 発行人：高井次郎 編集担当：植村善太郎

【 目 次 】

§日本グループ・ダイナミクス学会第 63 回大会へのお誘い	2
◆ 第 63 回大会開催の挨拶：山口裕幸	
§現場とグルダイ 産業界編	3
◆ 居酒屋化するゼミ：相馬敏彦	
§国際学会参加記	4
◆ APS28 回大会参加記：小池はるか	
§追悼文	6
◆ 鈴木康平先生を偲んで：山浦一保	
§常任理事会からのお知らせとお願い	7
◆ 役員選挙について：有倉巳幸	
§事務局からのお知らせ	7
◆ 会員データ調査協力をお願い	
◆ 研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について	
◆ 国際学会発表支援制度について	
◆ 実験社会心理学研究 掲載予定論文	
§グルダイ学会関係連絡先	9

★★★ 日本グループ・ダイナミクス学会第 63 回大会へのお誘い ★★★

第 63 回大会開催の挨拶

大会準備委員長 山口裕幸（九州大学）

4 月 14 日夜に熊本県を襲った大地震は、一昼夜おいて 16 日未明にさらに強い震度で襲いかかり、阿蘇から大分方面、天草方面へと被災地の広がりをもたらしました。しかも、その後は、各地ともに記録的な降雨に見舞われ、甚大な震災被害で困窮している被災地に、追い打ちをかけています。しかし、被災された皆さんは、苦しい中、心が折れそうになりながらも、必死に心を奮い立たせ、復興に向けて地道に力強く歩を踏み出しておられます。

そんな熊本・大分のお隣に位置する福岡が今年のグループ・ダイナミクス学会の大会開催地です。ひと脚伸ばすと、巨大地震がもたらす現実が横たわるところです。本学会会員には、減災・防災の活動や、被災後の復興活動に深く関わっておられる方が多数いらっしゃいます。今年の福岡での開催は数年前から決まっていたことで、熊本・大分の震災は偶然の巡り合わせに過ぎませんが、それでも自然の脅威と共に生きていく術について、豊かな議論を交わす良き機会となると思います。

もちろん、緻密なデザインに基づく実験室実験による研究も、質問紙調査による研究も、観察やインタビューに基軸を置く研究も、多様な研究発表の申し込みをいただきました。発表をお申し込みいただいた皆様、本当にありがとうございました。

本学会大会の規模は、例年、発表件数 90 件～100 件ほどで大きなものではありませんが、そうだからこそ落ち着いて充実した研究交流の場になる側面もあると思います。準備委員会一同、そのことを大切に心に刻んで大会運営を心がけたいと思います。

大会会場となる九州大学箱崎文系地区のキャンパスは、2 年後には新キャンパスに移転して、大正時代から続いてきた役割を終える予定です。寂しい気持ちもありますが、なくなる前に一度、皆さんに訪れていただけると幸いです。懇親会場は、大会会場とはまた異なる雰囲気的交流を深めていただけるように、博多と福岡を仕分けて流れる那珂川のほとりに位置する繁華街・中洲に、開放的な空間を準備し



ております。初秋の風に吹かれながら、一献酌み交わしつつ、語らいつつ、楽しい交流の時間を過ごしていただきたいと思います。

不慣れゆえ、至らぬ点多々あるかと存じますが、準備委員会一同、一生懸命に準備しております。会員の皆さん多数のご参加を心よりお待ちしております。

★★★ 現場とグルダイ 産業界編 ★★★

居酒屋化するゼミ

相馬敏彦（広島大学大学院社会科学部研究科マネジメント）

「うちのブランドに恋してほしいんですよ」。ある年長男性のこの一言で、研究が本格的に進み出したことがある。

このエピソードを含め、現場とグルダイというテーマで書き進む前に、簡単に自己紹介をしたい。私の所属先は、広島大学のマネジメント専攻というところである。名の示す通り経営学者の多いこの専攻に心理学者は私一人。社会人大学院を銘打っており専攻の授業やゼミの大半は平日の夜間や土日に開かれる。

社会人の学ぶ意欲はすこぶる高い、と思う。面接試験で「親（「先生」でも可）に受けて言われたんで、とりあえず受けました・・・えへ」なんて答える受験生はまずいない。ほとんどの人は、家族と過ごす時間や飲みに行く時間を割いてまで勉学に励む。みな真剣である。ほとんどの人が私より年長だが、総じて腰が低く丁寧である。少なくともしらふの状態ですら私にため口で話しかけてくる人はいない。ましてや、個人的に貸してあげた学術書に鉛筆でびっしり書き込みをして返し、「何これ？」と本の所有者（つまり私）に問い詰められ「もしかし、怒ってる感じ？」とつぶらな瞳でこちらを見返すこともない。

この専攻で学ぶ社会人の方がもつ現場はさまざまである。中小企業、大企業、役所、大学、病院、トレーニングジム、福祉施設、イベントの企画など、営利組織もあれば非営利組織もある。大学院で解明しようとする課題もさまざま。「いつまでも昔のやり方にこだわって変わらない（社内の）おじさんたち、何とかならないんでしょうか」といったものもあれば（多少オブラートにつつましました）、「合併前の町村への帰属意識を踏まえつつ、合併後の街への愛着を高めるには、どんな広報すればいいでしょうか」というものもある。これらはいずれも大上・相馬（2016）や福光（2016）として公表されているのでここに書けるが、諸々の事情から表に出せないような話しやデータも少なくない。

やる気のある学生さんとさまざまな現場の実状に迫ることができるのは、なんとうらやましい職場だと思われるかもしれない。社会科学のシーズを、現場のニーズに応じて価値ある情報に転換する仕事は確かにやりがいがあると思う。しかし、ことはそう簡単ではない。先ほど、社会人の方は往々にして丁寧だと書いたが、その距離感ゆえか、話しても本音にたどり着けないことが少なくない。問題意識はあちらこちらへと拡散し、募り募った不満、たまりたまった疑問が次から次へとあふれ、結局の



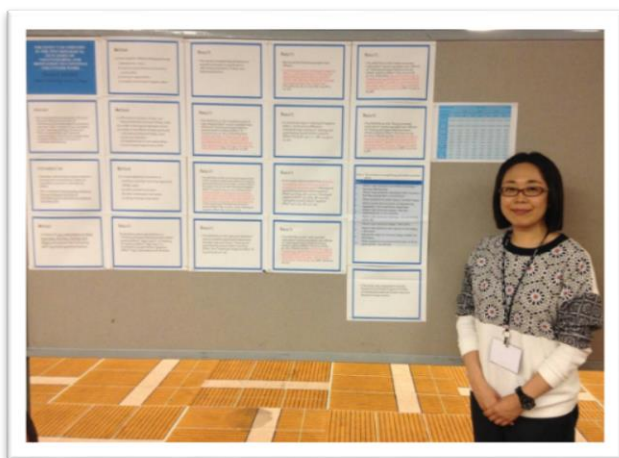
ところ何が知りたいのかがなかなか見えない，ということがよく起きる。その様子はさながら居酒屋トークのようである。私のゼミだけでなく，他のゼミでも同様のことがあると聞く。社会人の学生だからといって，自身のもつニーズを最初から明確に言語化できるわけではないのである。これは企業と共同研究を進める場合もそうである。冒頭のブランドに恋する発言は，真剣なミーティングを何度か重ねる中でこぼれ落ちた一言である。それによってようやくニーズが見え，何とかプロジェクトは前進した（相馬・清水,2016）。

産学連携を錦の御旗に現場のニーズと学界シーズをマッチングさせようとする試みは，簡単そうに見えて結構大変なことが多いと思う。その理由の一つは，シーズ同様，ニーズもまた多くの場合「種の集まり」に過ぎずそこからの選り分けを必要とするからである。話を聞いて聞いて聞く中で，始めて立ち現れるニーズも結構あるように思う。ゼミに居酒屋トーク，ひいては居酒屋は欠かせないのである。

★★★ 国際学会参加記 ★★★

APS28 回大会参加記

小池はるか（東海大学短期大学部）



2016/5/26～29 に開催された The 28th APS Annual Convention に参加してきました。ご存知の方も多いと思いますが，APS の正式名称は Association for Psychological Science であり，大会は毎年アメリカ国内で行われています。私は今回で APS 参加が 2 回目になります。日本の学会同様，アメリカ国内のあちこちで開催されるのですが，偶然にも 2 回ともシカゴでの大会に参加することになりました。

社会心理学を専攻している方は SPSP に参加することが多いと思うのですが，入試やら年度末に向けての仕事やらが立て込む時期に開催されるため，大学教員になってしまうと参加しづらいところがあります。年度初めは年度初めで忙しいのですが，個人的には 5 月末に開催されることが多い APS の方が参加しやすいです。また，私の研究のメインテーマは共感性であるため，社会心理のみを扱う学会よりも，様々な分野の発表がある学会の方が得るものが多い，というのも APS を選択する理由の 1 つです。

APS は，ICP や ICAP に比べると，なぜか日本人参加者が少なめです。英語が苦手，しかも恥をかく勇氣もない私は，国際学会にもかかわらず日本人同士で固まってしまうことが多いのですが，APS で真面目に学会参加しようと思うと英語を使わざるをえません。英語のトレーニングという意味でもオススメの学会です。APS 自体も北米以外からの参加を歓迎しているようで，今回の大会では，アブストラクトがアクセプトされた後，北米以外か

らの参加者の参加費が半額になるクーポンコードがメールで送られてきました（毎年このサービスがあるわけではないようです）。



今回の学会では、個人研究のポスター発表を行いました。ポスター発表と同時進行で、世界的に有名な先生方のシンポジウムが複数開かれていることもあるのか、国内学会のように在席責任時間中ひっきりなしに質問に来ていただけるということはあまりありません。しかし、「お祭り」的な国際学会のように、お目当てのポスターを見にいったらポスターが張られていなかったとか、発表

者が在席責任時間に不在であるとかいった光景は少ないように思います。

自分の発表もさることながら、様々な研究を見聞きすることで、今後の研究の展開に関する重要なヒントを得ることもできました。共感性に関するポスター発表は、以前APS参加した時から発表数・研究内容に大きな変化はありませんでしたが、新しく作成された尺度が使用している研究が比較的多かったように思います。常に最新の研究をチェックすることの重要性を再確認しました。シンポジウム



では、Fiskeらがプレゼンテーションした「The Heart of Conflict」が興味深かったです。集団間関係の感情をテーマにしたシンポジウムでしたが、国内外で移民問題やヘイトスピーチが話題になる中、この分野で共感性研究が貢献できるのではと考えさせられる機会となりました。

国際学会への参加の目的は、自身の研究を国外へ発信できる、海外の最新の研究知見にふれることができる、海外の研究者とのネットワークを作ることができる等、人によって多少異なると思います。APSはそのいずれの目的も果たせる学会ではないかと思っています。

 ★★★ 追悼文 ★★★

鈴木康平先生を偲んで

山浦一保（立命館大学）

今年 2016 年の七夕の日、鈴木康平先生が逝去されました。82 歳でした。この日が来ることは頭では分かっているはずでした。でも、訃報に接したときとても驚いてしまい、先生の体調のことも知らず、逝去されたことを受け止める準備もできていなかったという事実と向き合ったまま、ただその場に突っ立った感じでした。その数日後、出張から戻る電車の中で開いたメールを読んだとき、初めて実感できたのかもしれませんが。それは、先生と一緒に初めて学会に参加したとき、ご紹介くださった方からのメールでした。そこには、心優しい先生でいらっしゃったこと、（残された者は）これから生きて仕事をしていかねばなりませんといった旨の内容がしたためられていました。やっと何か感覚が戻ってきたというのか、ゆっくりと先生とご一緒した時間が思い出されていきました。

先生と出会ったのは、熊本大学教育学部で当時小学校の教員を目指していた私が教育実習を終え、何気なく受講した「発達社会心理学」の講義でした。先生は、“心を定義できたらノーベル賞もの”だと、心理学の奥深さをこのひと言で表されたことは、そのときの私にとって刺激的でした。授業ノートをとるのは大変で、先生は講義室に抱えてこられた書籍を開き、かなりの分量を読み上げられるのです。ちょっと待って！と思いながら、そして手や腕が疲れ切ってしまう 90 分間であっても、大人気の講義でした。

この講義がきっかけで、私は先生の研究室のドアを叩きました。その頃、先生はちょうど『現代青年心理学』の新版（1997 年、有斐閣ブックス）の編著、そしていじめに関するレビューをされる時期でした。“人はなぜ人をいじめ、なぜ人を愛するのか？”を問い続けておられました。このときの集大成が、『学校におけるいじめの心理（2000 年、ナカニシヤ出版）』です。資料が机の上に幾山も小高く積まれ、プリンターが忙しく動いていたことを覚えています。そのような研究室の中で、態度変容と説得的コミュニケーションに関する研究をもとに、価値が教育実践と切り離せないが故の素晴らしさと恐ろしさについて、戦争体験とともに熱く語られることがありました。そして先生は、“目の前で泣いている子どもがいたら、それを救ってあげるのが心理学”とお話されたことがありました。いじめと愛、教育が生み出す光と影…この対峙する人間社会の現象や教育に、あなたはどの向き合い教育に情熱を注ぐのかと、私はこのときとても大きな宿題を頂いてしまったようです。

そんな先生の仕事の合間には、絶妙なタイミングで学生たちが研究室に集い、甘いものがお好きだった先生はあたたかい緑茶とともに頬張っておられました。どんなにお忙しいときでも私たち学生の話に耳を傾けてくださり、そのような先生のお人柄に多くの学生が魅せられていったのでした。

ただもう、目を細めて微笑んでくださっていた先生を訪ねることはできません。次の学会でお会いできるかもしれない…ということもありません。それは、先生のもとで学んだ者にとって、とても、とても淋しいことです。ただ、先生の教え、研究に対して一つ一つ丁寧に、とても真摯に取り組んでおられた姿勢は私の中で忘れることはなく、先生からの宿題に取り組みたいです。

学問の師であり、人生の師でもあった鈴木康平先生、ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

★★★ 常任理事会からのお知らせとお願い ★★★

【 役員選挙について 】

担当 有倉巳幸（鹿児島大学）

本年度は、次期（2017 年度-2018 年度）の役員選挙を実施する年に当たります。以下の日程で実施する予定です。会員の皆様には、選挙台帳作成へのご協力と共に、積極的な投票をお願い申し上げます。

- 9 月下旬：選挙台帳（案）を送付
- 10 月下旬：選挙台帳（案）異議申し立て締め切り／選挙台帳確定
- 11 月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）の投票用紙、選挙人名簿などの送付
- 12 月上旬：投票締め切り
- 12 月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）開票
- 1 月上旬：理事の互選による常任理事選挙
- 2 月上旬：選挙結果の確定と公表

★★★ 事務局からのお知らせ ★★★

【 会員データ調査協力のお願い 】

2016 年度は会員名簿の更新年度となっております。会員データ調査票をお送りしますのでご回答のほどお願い申し上げます。詳細は送付いたします書面をご覧ください。締め切りが 7 月 29 日と差し迫っておりますが、ご容赦下さい。ご返送いただけなかった場合は、事務局に登録されている内容のまま掲載させていただきます。ご了承下さい。

お送りいただきました「会員データ調査票」に記載の個人情報については、日本グループ・ダイナミックス学会が責任を持って管理し、学会の運営並びに会員への名簿配布、当会開催事業のお知らせに必要な範囲内で利用させていただきます。

【 研究の国際化支援制度（英文校閲補助）について 】

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金を一部補助するものです。昨年度は 5 名の会員への補助を行いました。詳細については今年度の総会で報告いたします。

年齢の制限はありませんし、複数の論文校閲費を合算して申請できます。また、補助対象となった会員の方々についても、年度を超えれば改めて申請することが可能です。皆さま、奮って申請してください。

詳細は学会ホームページをご参照下さい。

(学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)

【 国際学会発表支援制度について 】

今年度より、日本国外で開催される国際学会での会員の発表支援を行う形に改正いたしました。アジア社会心理学会だけではなく、他の国際学会での発表に対する支援を毎年度実施いたします。発表予定のものだけではなく、すでに発表したものも支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。申請書類の提出期日は8月1日(月)です。皆さま、奮って申請してください。

詳細は学会ホームページをご参照下さい。

(学会 HP: <http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>)

【 実験社会心理学研究 掲載予定論文 】

■ 2016 年度 56 巻 1 号 (2016 年 9 月中発行予定)

一般論文

原著論文

黒川雅幸・吉田俊和

大学新入生における LINE ネットワークと友人満足感および精神的適応との関連
樋口 収・下田俊介・小林麻衣・原島雅之

行動免疫システムと福島県近隣の汚染地域の推定との関連
野波 寛・田代 豊・坂本 剛・大友章司

NIMBY 問題における公平と共感による情動反応：域外多数者の無関心は立地地域
少数者の怒りを増幅する？

資料論文

内田遼介・釘原直樹・手塚洋介・國部雅大・土屋裕睦

スポーツ集団内における集合的効力感の評価形成過程：成員の課題遂行能力に着目
した検討

特集論文

特集：グループ・ダイナミックスの〈時間〉

原著論文

矢守克也

アクションリサーチの〈時間〉

宮本 匠

現代社会のアクションリサーチにおける時間論的態度の問題

土屋耕治

組織の「時間」への働きかけ：組織開発における組織診断の事例から

日比野愛子

テクノロジカル・プラトール：生命科学実験室のグループ・ダイナミックス

★★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷（株）学会フォーラム内
電話：075-415-3661
FAX：075-415-3662
E-mail：jgda@nacos.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒463-8521 名古屋市守山区大森 2-1723
金城学院大学 人間科学部 多元心理学科 北折充隆研究室
電話：052-798-0180(代表)
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連

【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷（株）営業部編集校正課内
電話：075-441-3155
FAX：075-417-2050
E-mail：jiesp-hen@groupdynamics.gr.jp

【編集委員長】

今川民雄
〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西 2-3-1 北星学園大学社会福祉学部
E-mail：imagawa@hokusei.ac.jp

広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1

福岡教育大学教育学部 幼児教育講座 植村善太郎

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

【編集後記】

大雨の梅雨が終わり、蟬の声が賑やかな夏になりました。今号では、小さな冒険心を発揮して、新コラムコーナー「現場とグルダイ」を企画してみました。実践の現場と学問との交流の熱さを感じたり（季節柄、ますます暑いかも？）、ご自身の現場との関わり方と比較したりしていただければ幸いです。こうしたニュースの発信が、現場における問題解決、そして研究活動の発展に、どこかで寄与してくれればと考えております。（編集子）